共立女子大學
文藝學部報

文芸学部報 第一二四号
編集責任者 池上公平
二〇一六年四月一日
共立女子大学 文芸学部発行
東京都千代田区
一ツ橋二-二-一

学部報に関する
ご意見・ご感想を
お寄せ下さい。

E-mail:
gakubuho@
kyoritsu-wu.ac.jp

統計とゾミア

内田　保廣

GDPについて、平成十五年の十月の経済財政諮問会議の席上、麻生財務大臣がその正確さを疑問視する発言をしたと、新聞が伝えていた。あまり大きな記事ではなかったが、テレビのニュースでも少し触れていた。政権にあまり好意的でない媒体は、政府のGDP達成目標に向けた底上げ策だろうとか、消費税の改定をスムースに行うためだろうとか、負の側面から取り上げていたが、小さなニュースだったし、これと言った展開もなく終わっていった。

ちょうどその頃、アフリカのGDPに関する書物を読んでいたので、この記事が気になった。その本は“Poor Numbers: How We Are Misled by African Development Statistics and What to Do about It”で、邦訳は『統計はウソをつく―アフリカ開発統計に隠された真実と現実』（モルテン・イェルウェン　青土社　二〇一五年七月二十四日）だ。なぜ原題を示すかというと、一生懸命英語で読んでいたからなのだ。

どうして、邦訳のある本を英語で読む羽目に陥ったかということから説明しよう。これはkindleのせいである。御存知の方も多いと思うが、kindleは電子書籍リーダーの一番手である。僕にとって、電子書籍の利点は紙の本ではできない多量の書籍を持ち歩けることにある。この利点はありがたく、読みたい本があるとまず kindle版を探す。表紙のデザインが同じだったので間違えてしまったのだ。この本のkindle版は英語版しかなかったのだ。

kindleにはもう一つの利点がある。英語の辞書がついているのだ。分からない単語の上に指をのせると英和辞典をひいてくれる。単語の和訳が出て来る。ならばkindle版より千円高い邦訳を買い直すより、いっそのこと英語で読んでみようと思い立ったわけだ。

もう一つ説明が必要だろうか。どうして、日本文学とメディアの二股をかけている教師がアフリカの経済統計の本など読むのかについてだ。

この理由は一つではない。もともと統計に対して興味と疑問を持っていたことが第一だ。文学研究でも、コンピュータの導入以来、作家同定（ある作品を書いた作家が誰だか見分ける）などには、統計処理が使われる。統計は知っておくべき技法になった。ただ、期待されていたほどきれいに結果が出ない。だから、この技法の有効性に疑いを持つ人も多い。そして僕には、“Poor Numbers”にもチラリと名前が出てきている、ダレン・ハフの『統計でうそをつく法』（講談社ブルーバックス　一九六八年七月二十四日）という名著の影響もある。この本は今でも人に薦めたい一冊だが、データや指標の吟味がいい加減だと、統計はひどい結論を出すことを面白く説いている。僕の統計への興味はかえってこの本によって深まったとも言える。統計に興味があり、それを疑うことにも興味があるというわけだ。“Poor Numbers”を手に取るには十分な理由だろう。

さて、統計全体ではなく、とりわけ経済統計についての興味や関心の由来も説明しておこう。それは将来の生活への不安である。定年後、あるいは老後、もっと身近な目先の不安だ。少々生臭いが、僕は中国の経済状態に不安を感じている。この先、年金で生活することを考えると、どうしても、こんな所に目が行ってしまうのだ。この不安は僕一人のものではなさそうで、金融関係の友人などに話してみると、大丈夫だと言ってくれる人はまずいない。中国経済に不安を持つというのは、公開されている統計数字に不安を持っているからだ。少し前のアフリカの統計数字が怪しかったことは僕も知っていた。この本から中国の不安な数字について多少の知見が得られるかと考えたのである。そうすれば、この先の大きな変動への対処までは無理としても、せめて覚悟くらいは出来るかも知れないと思ったのだ。

そして、最後の理由はアフリカだ。少し前にチママンダ・アディーチェの“Half of a Yellow Sun”を読んだ。僕らが大学生のころ、一九七〇年前後のビアフラ戦争を題材にした小説だ。九世紀ごろのナイジェリアの青銅器、ロープドポットが小道具で登場してくるように、アフリカの前近代と植民地時代、そして植民地から脱け出した時代の人々や意識が、対立したり共存したりしながら流れていく大きな小説だ。その拮抗の中にアフリカの音声的な文化と西洋的な文字基盤の文化の絡み合いがあり、読みながら、そこについつい意識が向いてしまっていた。この読後感を引きずっていたものだから、もっとカメラを引いて、遠景から見てみたい欲求に駆られ、アフリカのマクロ経済の本に手をだしたのだ。

“Poor Numbers”で取り上げているアフリカは地中海沿岸や中近東ではなく、サハラ以南のあまり経済的に豊かではない国々だ。文化的にも声の文化が活きている地域にあたる。こうした場所で今、どういうことが起きているかという興味は、メディアに関わる問題でもある。

いまさら、オングの『声の文化と文字の文化』を持ち出すこともないが、メディアの変化が引き起こす意識変化の例が“Poor Numbers”にもあった。それはウガンダの農民の例で、日記に穀物の収穫を記録している農民は60％の収穫増になっているという話だ。“Poor Numbers”の著者Morten Jervenは世界銀行の調査報告書（“Can Diaries Help Improve Agricultural Production Statistics? Evidence from Uganda” World Bank Development Research Group Policy Research Working Paper 5715, June 2011）からこの話を引用し紹介している。貧困や飢餓から抜け出すことを課題としている国際機関は、おそらく、〝声〟と〝文字〟の違いを貧困と発展の違いと見るだろう。この例が文字の獲得を富饒化と結びつける例となるなら、それは〝ゾミア〟の問題にもかかわってくる。

『ゾミア―脱国家の世界史』（みすず書房　ジェームス・C・スコット　二〇一三年十月三日）は原題を“The Art of Not Being Governed-An Anarchist History of Upland Southeast Asia”といい、「統治されない技術」とでも訳せるのだろうか。副題の「南アジア高地のアナーキスト史」はやはりそのままの訳だと日本では評判が悪くなりそうな題名だ。

この書物は中国南部からミャンマー、タイ、インドネシアまでの広い範囲の高地にすむ人々が、統治＝国家化を拒否する姿勢を持ってその環境を選択していることを説くものだ。この一帯では環境が生活形態を規制するだけではなく、意識が生活形態を選択していることも明らかにしている。そして、メディアとの関係に限って見ると、文字への対処に特徴がある。それは単純に無文字なのではなく、文字を持つことを拒否する、あるいは彼らの伝承（文字がないので、口誦（こうしょう）によるしかない）にあるように、かつて文字を持ったがそれを捨てた、つまり否定したものとするのである。

定着を拒否して文字も拒否するゾミアの人々は、日記をつけてより多くの収穫を得ようとするサハラ以南の人々と対照的な存在だろう。もちろんサハラ以南の人々は定着した農民である。そしてこちらは国家の要素として、その経済生活はGDPに組み入れられ、登録され、悪く言えば管理される。あるいは数字を水増しされて、国際機関からの補助金を引き出す大切な道具に使われる。

貧困な〝声〟の時代に戻ることは我々にはもうできない。だが、我々の周りには、とりつくろわれたる指標があふれている。今、本来指標によって計られるはずの内容は忘れられ、指標をすべてとするような意識が当たり前になっている。ゾミアには戻れないがゾミアがあったことは忘れたくないものだ。

（うちだ　やすひろ　教授・日本文学）

シャルダン「銀のゴブレットとりんご」
1768年頃　カンヴァス　油彩　33×41㎝
パリ　ルーヴル美術館

美の旅

武藤　剛史

どんなフランスが好きかと問われれば、シャルダンが描いたフランスが好きだと答えたい。

シャルダンは、風俗画にしても静物画にしても、ごくごく平凡な日々の暮らしを、温かく静謐に満ちた詩情に高めている。プルーストは、シャルダンの絵ではすべてのものが「生きた自然になる」と讃嘆している。

（むとう　たけし　教授・仏文学）

大学随想

サルとタケノコ

吉澤　弥生

私が大学時代を過ごしたのは、共立のような華やかな都心の女子大学とは別世界の、大阪郊外に立地する地味な大学である。前半二年は文系学部と一、二回生の集まるそこそこ賑やかなキャンパスだったが、裏山からタヌキやイノシシが訪れる野性味あふれる所でもあった。後半二年の専門学部は理系学部の集まる広大なキャンパスの端っこにあり、最寄り駅から徒歩三十分の道のりは雪が降ると「遭難する」と恐れられた（その後医学部の病院が引っ越してきてモノレールが延伸され、だいぶ便利になったが）。

入学当時、構内にはまだ学生運動の名残があって、四角い文字で何やら書かれた立看板が並んでいた。教室には、カルト宗教の勧誘ビラと「カルト宗教に注意！」と書かれたビラが散乱していた。狙われていたのは地方から出て来た一人暮らしの学生だ。実際にアパートの隣人がひっかかったようで、親御さんが真っ青な顔で探しに来たこともある。でも当人とは顔を合わせたことがなく、お役には立てなかった。

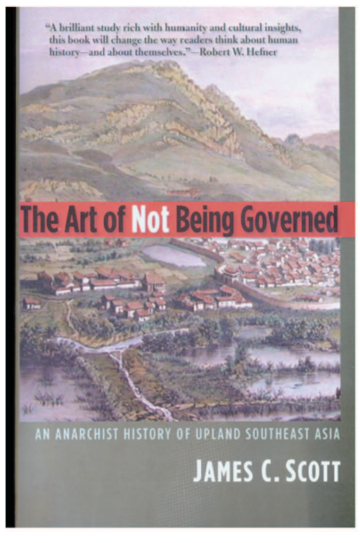
専門学部は人間科学部という名で、上から見ると建物が「人」の形になっているのが売りだった。その後増築して「大」になったり「犬」になったり、今は何とも言いがたい形になっている。文理融合の学部だったので、本で埋め尽くされた部屋だけでなくサルや九官鳥を飼育している研究室もあった。授業中何やら外が騒がしく、万博公園のついでに子どもたちが遠足に来たのかな、と思ったらサルだったり。知人の研究の実験台となり防音室の中でひたすら計算式を解かされたこともある。友人はサルと二人っきりの様子を観察したらしいが、何の実験だったのだろう。

学食は貧弱すぎて、そこそこの食物にありつくには徒歩十分の他学部の食堂に行かねばならなかった。そうなると自炊文化が生まれる。校舎の向かいには小山があって、春になるとそこで生えるタケノコは争奪戦が繰り広げられた。勝者の研究室からは、タケノコご飯が炊きあがる香りが立ちこめた。ただ、私のいたゼミはそういうパッションとは無縁だったので、というか、大学に来ない人たちの集うゼミだったので、最初からその戦いには参加していない。

講義は先生が手元の講義ノートを読み上げる、一方通行のものばかりだった。出席はとらない。「授業に出席して寝ているくらいなら、いい映画でも観に行ったほうがいい」とは文化人類学の先生の言葉だったか。感服して実行した。卒論も基本的に自力で仕上げた。ともかく、放ったらかしにされていたというか、基本的に自分のペースで大学とつきあうことができた。学びたいことがあれば学べるし、学びたいことがなければそれなりに。大学とはそんなものだと思っていた。いい時代だった…のかどうかはわからないが、少なくとも私の性には合っていた。

いばらであることは疑いないが、研究の道に進もうと考え始めるのもこの頃である。結局大学院には一年浪人をして進学、修了後も研究員としてさらに五年弱同じ場所で過ごすことになるとは、当時の私はもちろん知らない。（後半に続く。）

（よしざわ　やよい　准教授・芸術社会学）



"The Art of Not Being Governed－An Anarchist History of Upland Southeast Asia"の表紙

新入生への挨拶

文芸学部長　池上　公平

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

文芸学部のスタッフ一同、皆さんを心から歓迎します。しかしながら、おめでたいという言葉とは裏腹に、皆さんが生きているこの現代は、日本の内と外を問わず、平和とは言いがたい状況にあります。二〇一五年はさまざまな事件が世界を揺るがしました。難民、テロ、IS、日本人ジャーナリスト殺害、集団的自衛権と安保法制の問題等々。中でも中東におけるテロや難民の問題については、テレビ、新聞、インターネット等で皆さんも接したことがあると思います。一九八九年に地中海のマルタ島でジョージ・ブッシュ（父）米大統領とミハイル・ゴルバチョフソ連共産党書記長が会談し、冷戦の終結を宣言した時には、まさか世界がこのようになってしまうとは、私は想像もしませんでした。このことに関連して私が衝撃を受けたのは、はすみとしことという自称漫画家が難民を揶揄する侮蔑的な漫画を発表したことでした。はすみ氏に対して厳しい非難の声が上がったのは当然ですが、同時にこの出来事はイメージ、視覚というものの性質を示してもいます。問題はイメージそのものではなく、それを作り出し、受け取る人間の方にあるのです。暴力、不正、差別、不幸をもたらすのも人間であり、平和、正義、平等、幸福をもたらすのも人間です。皆さんが後者の人間であり続けるために、大学の四年間で人間にとって何が大切かを学んでくれることを切に望みます。

映画祭

田口　亜紀

私は映画祭が好きだ。短期間とはいえ映画祭の開催期間中、映画中心の生活に浸るのはこの上ない幸せである。

ヨーロッパの映画祭といえばカンヌ、ベネチア、ベルリンが有名だろうが、地方でも映画祭は多く開かれる。ずいぶん前になるが、ロカルノ映画祭で、映画三昧の日々を送ったことがある。ロカルノは、スイスのイタリア語圏ティチーノ地方にある小都市で、「ロカルノ平和条約」が締結された町として、また、風光明媚な気候と、マジョーレ湖と、八月に十日間行われる映画祭で知られている。

映画祭の開催中、町は映画中心に動いている。遠方からやってくる映画関係者と愛好家はもちろんのこと、町の住民もこの時は、映画という磁気に吸い寄せられていく。ロカルノ映画祭の最大の特徴は、観客の投票で「観客賞」を選ぶことである。

私がロカルノ映画祭に行くきっかけになったのは、スイス人の友人がロカルノの実家に招待してくれたことだった。彼女も私同様、映画好き（シネフィル）で、一緒に映画を見ようといって住民に購入の優先権があるフリーパスを手配してくれた。そのおかげで映画祭では多いときに一日五本映画を見た。

肝心の上映作品だが、劇場公開前の大作、「マイナー」な国出身の監督による名作、若手監督のデビュー作を見ることも、回顧上映での巨匠の知られざる傑作を発見することもある。上映後のトークセッションでは、映画制作の秘話を聞ける。翌日の地方紙にはインタビュー記事が出る。スターが普通に町を歩いていて、彼らを間近に見られる。映画人が身近にいる例を挙げれば、そばでアッバス・キアロスタミ〔＝イランの映画監督〕がサインを求められていたし、ある知人は、気がつくとジャン＝リュック・ゴダール〔＝現代を代表する映画監督。スイス在住〕が隣にいたと言っていた。

映画祭の間、日没後に野外上映があった。晩は冷えるので、私たちは上着を用意して会場に向かった。この晩はフランスのドキュメンタリーを見た。昼間の室内から一変して、さわやかな微風を肌に感じながらの映画鑑賞は格別だった。スイスの夏ならではの体験だ。

今では、学生時代のように映画をはしごする機会はなくなったが、企画上映に足を運ぶことはある。東京では一回限りの回顧上映のほかに、毎年決まった時期に開催されている、フランス映画祭、イタリア映画祭などの国別の特集、あるいは難民映画祭などのテーマ特集がある。一応上映作品一覧には目を通すのだが、最近はそれで終わってしまうことが多い。

映画の鑑賞料金は決して安くない。特に学生には学割があるとはいえ、毎日映画館に通うのは経済的にきつい。そこで、映画試写状持参という方法ではなく、無料で映画を鑑賞できる術を、最後にご紹介したい。

EU映画祭は、ヨーロッパの多様性を発見してもらおうという趣旨で、京橋の国立フィルムセンターで開催されている。数年前、そこでベルギー映画を見た。『抵抗』という作品で、第二次世界大戦期、ドイツ占領下のワロン地方（フランス語圏）でのレジスタンスを描いていた。フィルムセンターのチケット売り場で共立の教職員証を見せたら、映画料金は無料になった。

共立に通うみなさんはご存じだろうか。学生も教職員も、この施設の「キャンパスメンバー」なので、学生証か教職員証を提示するだけで、難民映画祭に限らず、フィルムセンターで上映されるほぼすべての映画を無料で鑑賞できるのである。近々*三隅研次特集で、スクリーンに市川雷蔵が登場するらしい。本館十四階の仏文研究室付近の壁には、映画情報が満載なので、辺りをお歩きの際には、映画をチェックしていただければ幸いである。（*二〇一六年一月時点）

（たぐち　あき　准教授・フランス文学）

本館14階仏文研究室付近には映画情報が満載

一瞬で消えてしまう夢のなかに

福嶋　伸洋

水を溜めたブリキの缶を頭の上に乗せて、女たちは土の坂道を上ってゆく。バラック小屋が立ち並ぶその場所での暮らしは、けっして楽ではないのだろうけれど、まばゆい青空の下、ほがらかな笑顔を見せる大人たち子どもたちは、陽気に日々を送っているように見える。そこに「悲しみは果てなく、幸せは儚い」と歌う物哀しい声が重なり、明るく穏やかなその光景が、紙一重のところでやっと保たれていることを仄めかす――「貧しい人びとの幸せは、カーニヴァルの大がかりな幻のよう。一瞬の夢のために、人びとは一年を働き詰めて、王様の、海賊の、花売り娘の衣裳（ファンタジーア）を作る。灰の水曜日には、すべては終わってしまうけれど」。

一九五九年、リオのカーニヴァルを世界に知らしめた、フランス人監督マルセル・カミュの映画『黒いオルフェ』の始まりのシーン。ボサノヴァの傑作のひとつとしていまでも世界中で愛されている、詩人ヴィニシウス・ヂ・モライスと作曲家トム・ジョビンが手がけたこの歌〈幸せ A Felicidade〉には、元はまったく異なる言葉が当てられていた――「幸せは、狂おしくも繊細なもの。そこにはあらゆる色の花と愛が、小鳥たちの巣が、すばらしいものすべてがある。これほど繊細で儚いので、ぼくは彼女、幸せを優しく扱う」。

映画の原案となった戯曲『オルフェウ・ダ・コンセイサォン』の作者でもあるヴィニシウスが書いたこの詩についてカミュは、売れそうにないから、という理由で、みんながカーニヴァルの前にする仕事、紙の衣裳作り、裁縫、色塗りなど、手間ひまをかけながらも、一日しか見せ場のないものを描いてほしいと、トムを通じて詩人に伝えた。ヴィニシウスはその横暴に不満を覚えながらも、書き換えた。

この意味で〈幸せ A Felicidade〉は、リオのカーニヴァルに対して外国人（グリンゴ）が抱く幻想にもとづいてできあがったとも言えるけれど、この歌がそのためにこそ、永遠に記憶されるものになったということもまた、否みがたいように思える。カミュの〝注文〟で書かれた一節には、一瞬で消えてしまう夢のなかに、それでもなお心を照らしつづけ、温めつづけるような微かな光を見出そうとする心持ちが歌われている。カーニヴァルを待ち望み、そこにすべてを懸けるリオの人びとの想いを、これほど易しい言葉でこれほど巧みに捉えた詩は他にはない、と言っても過言ではないかもしれない。

わたしたちのまなざしはいつも、知らず知らず誰かにみずからの幻想を投影しながら、その誰かの姿を捉えることしかできない。そしておそらく、まなざしがみずからに向けられるときにも同じく、知らないうちに何らかの幻想を投げかけながら、みずからの姿を捉えることしかできないのだろう。そうだとすれば、いくらか重なり合い、いくらかずれ合う、いくつもの幻想があるだけで、ひとつの真の姿というものは存在しないのかもしれない。

ヴィニシウスが初めに描いた幸せの姿――自画像――は、詩人みずからの心をくすぐることはできたとしても、カミュの目にはごく凡庸なものと映った。カミュが望んだ、ヴィニシウスには茶番めいたものと見えたにちがいないファンタジーア fantasia――この単語には「衣裳」と「幻想」というふたつの意味がある――をまとったときに初めて、詩人は、他の誰のものでもない無二の輝きを見せることになったように思える。

（ふくしま　のぶひろ　准教授・ブラジル文学）

さくら賞

文芸学部の優秀な卒業論文・卒業制作に与えられるさくら賞。平成二十七年度は、次の作品に贈られました。

嘉治有希（文芸メディアコース）「現代のファーストメディア考　～テレビとインターネットの流行創出について～」

今昔庵 ―きのう・今日・あした―

時代を旅して

望月　公恵

卒業してから、神田界隈を初めて歩いたのは三十年ほど前の初夏である。私は三人目の娘がお腹にいて、主人と娘二人と一緒だった。

在学当時は、休講を知るや、友と北の丸公園や国立近代美術館に繰り出した。それらの景色を眺め、懐かしい校舎を見上げていたら、偶然、英文学の吉田正俊先生が校舎の階段を降りていらした。

謝恩会で、先生はイタリア語で挨拶された。数か国語を習得されていることは知られていたから、更に他の言語を学ばれていることに、参加者から一様に溜息が洩れた。卒業しても、何かしら学び続けたいと思った瞬間である。

六十歳を目前にした頃から、都内を散策している。人文社『江戸東京散歩』という本を携えてのことである。江戸切絵図と現代の道路を巧みに当てはめ史跡を紹介しているから、容易に見当がつく。

その本の「飯田町駿河台小川町絵図」の頁で、『南総里見八犬伝』を著した滝沢馬琴が母校の近くに住んでいたと知った。行ってみると、九段郵便局から徒歩五分ほどの場所で、現在は、邸内の井戸のみが残っている。

江戸が開府して四百年も過ぎ、今の街に当時の面影を留めているものは殆ど無い。が、史跡の前に立つと、その時代を垣間見られるような気がする。神保町～御茶ノ水～湯島の史跡は近いので歩く。

数年前、趣味の朗読で谷崎潤一郎の『刺青（しせい）』を学んだ。文中の、「月が対岸の土州（とさしゅう）（土佐の国の異名）屋敷の上にかかって」という件（くだり）が気になった。深川に住む刺青（ほりもの）師の住居を、『江戸東京散歩』の地図で辿り、今の田螺（たにし）稲荷神社では？と見当をつけた。古地図の神社の向かいに、『高井土佐守』とある。

これが高じ、古文書を勉強するようになった。変体仮名は、毎晩寝る前に復習をする。例えば、「者」を「は」と読むが、崩れたような筆致も覚えるしかない。

頓知で有名な一休禅師の伝説をまとめた『一休諸国物語』では、山猿が命を助けられた恩返しに、苺を柏の葉に包み差し出した、と例に引き、畜生でも人の恩に報いる、それをしない人間は猿にも劣るとある。

時代を越えた警鐘のように感じる。人として生きることの大事さを、絶えず意識したい。現代人は、科学の発達による生活の便利さを楽しむことに、気を取られ過ぎているのだから。

また、戦のみでは時代は動かなかったようだ。『雑記乾坤（けんこん）』という資料では、秀吉亡き後、次の天下取りは誰？という諸侯達の雑談の場で、黒田如水が、家康である、と述べている。

江戸時代の『飯盛（めしも）り女請状（うけじょう）』は、親が娘の奉公期間の延長を願い出ている。飯盛り女というのは、大概は遊女なのだ。女性の地位が低かったというのは、こういうことかと胸が痛む。

時代を旅するような古文書の世界を、これからも楽しんでいきたい。

（もちづき　きみえ　昭和四十八年度　文芸学部英米文学コース卒業）

都指定旧跡 滝沢馬琴宅跡の井戸

異動・消息

◇昇任
藤田岳久教授（准教授）
浦野郁准教授（専任講師）
福嶋伸洋准教授（専任講師）
◇退職
〈教授〉近藤瑞男、塩川浩子
〈助手〉松尾依子
◇新任
〈専任講師〉滝沢明子、土田牧子
〈助手〉菊地絢子

研究紹介

吉澤　弥生
「労働者としての芸術家たち―アートプロジェクトの現場から」『文化経済学』第十二巻第二号、二〇一五年九月

曹　元春
『朱子絶句全譯注』（共著）第五冊　汲古書院　二〇一五年八月

堀　新
『織田信長の古文書』（共編著）柏書房　二〇一六年一月

笠智衆の微笑

村井　華代

舞台は日々生まれて消えるが、映画は一つの完成した姿で時間を過ごす。そこが映画と演劇の違いで、演劇では全てが観客である私たちと共に変化してゆくが、映画では変わってゆくのは常に私たちの側だ。だから、古い映画を見ると、ずっと昔に去った人に会い、問われるような気がする。今あなたはどこにいるのかと。

昨年、原節子が亡くなり、何度目かの『東京物語』（一九五三）をテレビで見た。昔、好きだったのは、義母が亡くなったという電話を会社で受け、デスクでぼんやりしている原節子のカット。あの完璧な笑顔よりも、それが消えた瞬間こそ美しく思えた。だが今では、その完璧な笑顔で「あたくし猾いんです」と言わせた小津安二郎にこそ驚く。戦死した夫を思い出さない日さえある、と原節子。だが私たちは知っている、戦後を生きるとはそういうことだ。誰にもそれを非難できない、と。だが彼女は冷静な笑顔で言う、「猾いんです」……

単に古くなり、懐かしめばよい映画は数多ある。だが小津作品は、時代の安易な尺度にはならない。私たちに残された、永遠に説明のつかない何か……遺作『秋刀魚の味』（一九六二）から一部、シナリオを傍らに再生しよう。

戦時中は駆逐艦の艦長、今は平穏な会社勤めの笠智衆が、久しぶりに海軍時代の部下・加東大介と会い、小さなトリスバアに飲みに行く。加東があの卵のような顔で言う。「ねえ艦長、どうして日本負けたんですかねえ」。「ウーム、ねえ……」と曖昧に微笑している笠智衆。加東「けど艦長、これがもし日本が勝ってたら、どうなってますかねえ?」笠（笑顔）「さァねえ……」。加東「勝ってたら、艦長、今頃はあなたもわたしもニューヨークだよ、ニューヨーク。パチンコ屋じゃありませんよ。ほんとのニューヨーク、アメリカの」。笠（笑顔）「そうかねえ」。加東の埒もない話は続く。もし日本が勝っていたら、「目玉の青い奴が丸髷か何か結っちゃって、チューインガム噛み噛み三味線ひいてますよ。ザマァ見ろッてンだ」。笠（依然として笑顔）「けど敗けてよかったじゃないか」……

タオルを鉢巻にして、バァのマダム岸田今日子が銭湯から戻る。彼女が軍艦マーチをかけ、ご機嫌の加東は海軍式に敬礼して店内を行進する。「ねえ艦長、艦長もやってくださいよ、ねえ!」岸田も敬礼し、歯を見せて華やかに笑う。笑顔の笠智衆、自らも敬礼……。

また別の場面。娘・岩上志麻が嫁いだ晩、笠智衆は一人このバァを訪れる。岸田がかけた軍艦マーチに、二人の酔客が言う。「大本営発表……」「帝国海軍は今暁五時三十分、南鳥島東方海上に於て……」「敗けました」「そうです、敗けました」（二人薄く笑う）……

その傍らで、微笑んでいるような、あるいは泣き出しそうな、笠智衆の曖昧な肩。

この映画が公開されたのは戦後十七年目。吉田喜重が「底知れない異様さ」と言ったこの軍艦マーチの場面を、二〇一六年の私たちはどう見るか。少なくとも私には、「敗けてよかったじゃないか」と微笑む笠智衆は、預言者じみて、空恐ろしくすらある。そのくせ「そうです、敗けました」と言われて微かに歪む彼の顔を見ると、何やら暗く冷たいものに触れたように感じるのだ。

そして思う。今、自分が見ているものの正体を私は永遠に知らない。あの戦争は何であったと、論じても虚しい。正解も解決も結論もない、言葉にならない日本の思い出。だが私は笠智衆の優しい顔を通して「それ」を見る。曖昧に笑い、あるいは曖昧な悲愁に沈む彼の表情が映す「それ」を前に、ただ言葉に詰まる。そして自分たちの乗った船は七〇年ぶん岸から遠ざかったと思っていたが、そうではなく、単に迷って漂流していただけだったような気がしてくる。今、私たちはどこにいるのか……

最後の場面。「一人ぼっち」の笠智衆の横顔は、直視するのが憚られるほどに寂しい。台所でヤカンからコップに水を注いで飲み、椅子に腰かける。その顔はもう見えない。

（むらい　はなよ　教授・西洋演劇論）

劇芸術研究室蔵書から

研究ノート

百貨店と動物のよもやま話

大島　十二愛

三越百貨店に鎮座する動物といえば、そう、お馴染みのライオンである。初めてこのライオン像がお披露目されたのは一九一四（大正三）年九月一五日の、三越日本橋本店新館が落成したときのことだ。青銅製のライオンは、ロンドンのトラファルガー広場ネルソン記念塔下にあるブロンズのライオンを模して造られている。元三越専務の日比翁助（一八六〇～一九三一）は、老舗百貨店ハロッズ視察のため訪英した際、広場のライオン像が人々の憩いの場となっている様子に感銘を受け、その賑わいを日本橋にもという思いから特注したという。日比は我が子に「雷音」と名付けるほどのライオン好きであったという逸話もものこされている。ライオン像はまさに、三越がかつての呉服店から、ハロッズを範にした「デパートメントストア」へ生まれ変わろうとする過渡期に登場した、新たな近代的百貨店の象徴であると同時に、その高らかなる宣言だったのかもしれない。

さて、三越にいたのはライオンだけではない。先述の三越日本橋本店新館が新築される少し前の一九〇九（明治四二）年、期間限定ながら三越に動物園があったことはあまり知られていない。動物園といっても、上野動物園や多摩動物園のような大掛かりなものではなく、三越が主催した第一回児童博覧会の会場中庭に設けられた八角形の檻（動物籠）がそれである。同年四月二日付の東京朝日新聞によれば、その中には猫六匹と熊、犬四匹に猿六匹が同居していて、猿のうち二匹だけ三越の白半纏を着用していたという。「犬猿の仲」としばしば例えられる犬と猿だが、実際この時の動物たちはというと、仲睦まじい姿で愛嬌を存分にふりまき、子どもたちに大人気だったようだ。日比の発案により行われた児童博覧会は、百貨店が開催した博覧会の嚆矢（こうし）である。今年の干支のお猿にちなんでもう一つ。一九五五（昭和三〇）年には、本店屋上遊園に猿が運転手をつとめるお猿の電車「ニコニコ号」を走らせている。これはこどもの日を祝して行われた催しで、約一か月間、子どもらの喝采を浴びながら運行した。

ところ変わって、日本橋高島屋。戦後まもない一九五〇（昭和二五）年の夏、屋上にタイから来日した一頭のアジアゾウがお目見えした。銀座から日本橋のあいだをパレードしながらやってきたというその子ゾウは、「高子ちゃん」と名付けられ、飼育された。高子ちゃんは四年間、高島屋の屋上で多くの子どもたちに愛されたが、体が大きくなり屋上では飼えなくなったため、上野動物園へ引き取られ、その後、移動先の多摩動物園で一九九〇（平成二）年事故により没した。高子ちゃんが来日してからちょうど四〇年目のことだった。

昨年一一月、日本橋高島屋の屋上を久しぶりに訪れた。高子ちゃんの背中をうつした緩やかな双曲線をたたえる機械室のフォルム（図参照）が、往時の高子ちゃんの姿を彷彿とさせる。たまたま号りこんだ工事中のクレーンがまるでゾウの鼻のようでもある。嬉しそうにパオーンと鼻を振り上げる高子ちゃんと、歓喜する子どもたちの声が今にも聞こえてきそうな気がした。

（おおしま　そにあ　准教授・メディア史／歴史社会学）

日本橋高島屋屋上の機械室（筆者撮影）

映画を〈聴く〉

沼田　知加

小学生の頃、年に一回「映画鑑賞」の日があった。給食を食べた後、えっちらおっちら椅子を持って講堂に集まり、演壇上に大きく映し出される映画を見る高揚感らしきものが、そこにはあった。

けれども、どんな映画を見たのか、ほとんど覚えていない。弱肉強食の野生動物の生態を追ったドキュメンタリーを、迫力満点の大画面で見たこともあった気はするのだが……。映画鑑賞会の記憶は、椅子を抱えて校庭を歩くときの砂埃の匂いに尽きる。

親に連れられて映画館で見た映画のいくつかは、題名も内容も思い出せる。しかし、子どもの頃に見た映画の多くは、学校の講堂であれ、映画館であれ、テレビであれ、自分で選んだものではなかった。

自意識過剰というわけではないが、映画に限らず、「これが私の原点」と公言するのは、なんだか気恥ずかしい。私が初めて自覚的に選び、映画館で一人で、繰り返し何度も見たのは『小さな恋のメロディー』（一九七一年）という映画だ。乙女すぎる邦題と違って、原題はきわめてシンプル——Melodyである。

当時の私と同じぐらいの年齢の少年少女が、親や学校の先生に反抗し、友だちの助けを借りて駆け落ちしようとする物語だ。「一人で繰り返し」見たのは、細部をとにかく全部覚えておきたかったからだ。

メロディーが歩くロンドンの街並み（ジャムの瓶に入れた金魚を放すのは、馬用の水飲み場）、ダニエルが友人と乗り込むタクシー（旧型の少し丸みのある車体が懐かしい、通称ブラック・キャブ）、二人が通う学校の制服（ブレザーの下に組み合わせるギンガム・チェックのワンピースは色とりどり）。学校の音楽の授業でダニエルはチェロを弾き、体育の授業でメロディーはバレエを踊る。一九七〇年代の日本の、普通の小中学校ではあり得ない光景が繰り広げられていた。

映画館に見に行くだけでは飽き足らず、近代映画社から刊行されていた原作の小説を繰り返し読んだ。すると、映画ではよく分からなかった細部も判別する。どうやら彼らの住む地域はランベスらしいと知った。いつの日か聖地巡礼のためにロンドンに行こうと決めていたものの、詳しい情報を手軽に得る手段がないために、繰り返し映画を見て、繰り返し小説を読むしかなかったのだ。

これらの体験は、小学校高学年から中学生の頃の話である。高校生になって、大きな書店でたまたま見つけてしまった。映画の音声をほぼそのまま収録したカセット・テープ付きの、英和対訳シナリオが売られている!そんな夢のようなものがこの世にあるなんて、その存在を知らなかった自分が恨めしかった。映像はないけれど、これさえあればいつでも映画を「聴ける」のだ。手持ちのお金で買える値段ではなかったため、その日はただ眺めただけだった。翌週あたりに、同じ書店の同じ棚に直行し、無事手に入れたものの、テープが擦り切れてしまうのが怖くて、繰り返し何度も聴く贅沢はできなかった。

今私の手元には、数年前に買ったDVDがある。いつでも好きなときに好きなだけ、何十回でも見ることができる。でも、実は一度もDVDで見ていない。なぜだろう? 「いつでも好きなだけ」は曲者だ。子どもの頃には、リヴァイバルされる度に映画館に通って見たのに……。TV放映があるときは、深夜でも見ていたのに……。

初めてロンドンに行ったときに、地元の人しかいないようなランベスをあてもなくただ歩き回るだけで満足していた。今では、インターネットで検索すれば、十四カ所ものロケ地情報が易々と手に入ってしまう。でも、食るように映画を見て、小説を読んで、映画を「聴いて」いただけの幼い情熱を、懐かしく、愛おしくも思うのである。

（ぬまた　ちか　教授・アメリカ文学／アメリカ文化）

黄ばんでしまったパンフレットとカセット・テープが宝物

心象点描　フォトギャラリー

木々は何を語っているか

遠藤　耕太郎

学生たちがアクティブに参加し、作り上げる授業（KALECO）が始まった。昨年度はメーテルリンクの『青い鳥』の上演を行い、私も少しお手伝いをした。

ダイヤモンドを回すと真実の世界が見えるという帽子をもらったチルチルとミチルたちは、青い鳥を探しにさまざまな世界を訪れる。その中に「森」の場面がある。

夜の森、木々がざわざわと枝を揺らしている。チルチルがダイヤモンドを回すと、木々の声が聞こえてくる。KALECO学生の作った台本から少し引用する。

ポプラ　木こりの子め。お前の父親に、俺たち木は随分ひどい目に合わされてきたんだぞ。

ブナ　その通りだ。私たちの身内だけでも、息子、叔父、叔母、従姉妹たち、嫁、孫……みんな殺されてしまった。

木々たちは二人を殺そうとする。あわやというところで、ダイヤを回して、二人はこちらの世界に戻ってくる。チルチルは彼らが怒っているのは意地悪だからだと考えるが、二人を守護している光の精は、

光　人間は、この世でたった一人、万物に立ち向かっているということが、よくわかったでしょう。

と言って、この場面は終わる。二十世紀初頭の作品である。自然を殺して生きていることへの罪悪感を、メーテルリンクはかなり肯定的に、人間存在の必然として語る。

ところで、八世紀の日本神話には「草木言問う」世界、つまり草木が喋る世界が描かれている。それらはすべて、そのように自然が喋るような荒ぶる世界が、天（高天原）の神々によって平定され、現在の平和な世界があるという文脈で語られている。古代神話は日本の王権（国家）の正当性を描く書物であるから当然だろう。ここに自然に対する罪悪感はない。自然の脅威を克服した若々しい国家の満足感が語られているだけだ。

私が調査している中国西南の少数民族ナシ族の人々は、この世の始まりを、次のように語っている。昔、ル神とセ神が話し歌った時期があり、樹木が歩ける時期があり、石が会話する時期があり、大地が揺れる時期があった。

ル神とセ神は兄妹で、二人が兄妹婚をして肉の卵を産み、それを切り刻んで天地にばらまいた。天に投げられた肉片は鳥になり、地上に落ちた肉片は草木、虫になり、山の麓に落ちたものが人間になり、河海に落ちたものが水鳥や魚、蝦になった。

つまり、人間と自然は最初の兄妹神から生まれた兄弟だということだ。ここには人間が自然を殺すことへの罪悪感も、自然を克服した人間の満足感も語られない。木々が歩いたり石が話したり、大地が揺れるなかで暮らすことは大変だが、かつて人間はそういう世界の中で誕生したという、素朴な充全感がある。

自然に対する罪悪感、自然を克服した満足感、そして自然と人間は兄弟であるという素朴な充全感。人間は自然の声をさまざまに聞いてきた。

私たちは、自然をほぼ克服した時代を生きている。非常に住みやすい。ただ、自然を克服すればするほど、私たちは充全感から遠ざかり、満足を感じられず、罪悪感に打ちのめされることにはなるのだろう。

（えんどう　こうたろう　教授・日本古代文学）

須田基揮　画

アーツの窓

〈英語英米文学〉進化するコース

英文コースは昨年度より杉村使乃先生をお迎えし、現在六名の専任教員がいます。これは、実は近年で一番多い教員数になります。それぞれの専門分野を書き出すと、アメリカ文学・文化、イギリス文学・文化、児童文学、英語教育、言語学、比較文学、翻訳、と非常に多岐に渡っています。この規模の大学で、教員の専門がこれだけバラエティに富んでいる英文科やコースはなかなかないのでは?と自負しています。さらに、卒業生である二人の助手が、皆さんの日々の勉学について親身になってアドバイスしてくれます。どの学年に所属する学生にとっても、新しい学びの窓が開く一年になるよう、全員でサポートしていきたいと思います!

クイズ：英文コースの卒業論文が、万年筆での手書きからパソコンでのタイプ形式に切り替わったのはいつ頃でしょう?一九八五年、一九九五年、それとも二〇〇〇年くらい?答えは英文研究室（一四一二）にて。先輩方の卒論を実際に手に取り、コースの歴史を感じてみて下さいね。（浦野）

〈造形芸術〉共立の助手

共立女子大学には助手というものがいます。その存在に気付いているでしょうか。授業の準備や片付けをして先生にくっついて歩いたり、皆さんの学生生活に必要な諸々の手続きのため書類を作ったり電話したりしていますが、何者なのかと問われると、本人たちも一言では説明しづらいようです。「何しているんですか?」と質問すれば、「色々」と答えることでしょう。

「何者ですか?」については様々。でも「共立の卒業生」というのは大抵共通しています。身近な卒業生に対して、皆さんに何か少しでも良い印象を持たれるといいのですが。もう一つ共通点を挙げると、助手というのは色々な、よく分からない仕事の中で、学生の皆さんと関わり、陰ながらサポートできることが、唯一と言っていいほど励みになっているということです。これはきれいごとではなく、何故分かるかというと、私も助手だったからです。最大五年という任期を終え、この四月からはもう助手ではなくなりました。わけが分からないことに囲まれながら、五年間勤めました。あーあ、疲れた。でも楽しかったこともたくさんありました。皆さんのお陰です。今しかない学生生活を、楽しみつくして下さい。（松尾）

〈劇芸術〉新しい時代

永らく「劇芸術研究室の顔」であった近藤瑞男先生が、三月をもって御退職になりました。今後も演劇評論家・陶芸家・スノードームコレクターとしての御活躍は続くことでしょうが、大学でお会いする機会が少なくなるのは寂しい限りです。今後、歴代の偉大な先生方が築かれた伝統を守っていくのは、並大抵のことではないでしょう。

しかし、近藤先生の後任として、土田牧子先生をお迎えすることができたのは、大きな喜びであり、希望です。黒御簾音楽の研究はすでに高く評価され、日本の古典芸能全般からオペラ・ミュージカルにも通じた新進気鋭の研究者です。阿部由香子先生、村井華代先生に土田先生を加えた、三人の実力派女性教員が、劇芸術コースの新しい時代を拓いて下さるものと信じています。そしてあと四年、今年入学した人が卒業するまで、宝塚歌劇の授業も続ける予定です。（国）

〈日本語日本文学〉研究室を訪ねよう

高校までと違って、大学の教員は毎日研究室にいません。出校していても、授業や会議、なんやかやと研究室を不在にすることも多くあります。それでも、学生のみなさんにはぜひ研究室を訪ねてほしいと思います。突然でもよいですし、確実に会いたい場合は予約をとって。私は学生時代、ゼミの先生をはじめ、他の先生方の研究室をかなりの頻度で訪ねていました。授業でわからなかったことや、確認したいこと、今何にとりくむべきか、そのためには何を調べたらよいのかなど、授業では聞けなかったいろいろな話を研究室で伺うことができました。変な言い方になりますが、我ながら授業料分以上のものを絞りとらせてもらったと思っています。

新しく入学した一年生はもちろん、コースに所属したばかりの二年生も敷居を高く感じる必要はありません。日文研究室（一四一一）には、個性的かつ（時には過剰なほど）親切な教員（内田、半沢、遠藤、深津、岡田）、助手（齋藤、市地）がいますから、是非遠慮せず訪ねてください。（岡田）

〈フランス語フランス文学〉感覚を研ぎ澄ませて

J'entends pleurer.（泣き声が聞こえる。）ドビュッシーやフォーレの音楽でも知られるメーテルリンクの戯曲『ペレアスとメリザンド』はこのような一文から始まります。三年次に受講した仏文学講読の授業でこの作品と出会い、仏文の仲間たちと冒頭からの数行を一緒に朗読したときのことを今も鮮明に覚えています。このとき知覚動詞の用法を習いましたが、この作品には聴覚をはじめとする様々な感覚が織り込まれています。感覚と象徴の森の中で謎深きメリザンドの心を読み解きながら、文学の奥深さを教わりました。

昨年度、仏文コースでは有志学生を募ってイオネスコの『犀』の観劇会を開催しました。実際に舞台を見て感じ取った台詞や演出のあり方から、感覚と知識、想像と思考力を総動員して読解に挑む貴重な機会となりました。

さてこの春、三十四年にわたり仏文コースを導いてくださった塩川浩子先生が退任され、滝沢明子先生が着任されました。滝沢先生のご専門はロラン・バルト。文学のみならず宝塚にも精通していらっしゃいます。（及部）

〈文芸メディア〉大人数だけれども…

文芸メディアコースは、他コースと比べてコース生が多いのが特徴の一つです。一学年が百名以上いることもあります。これは、私が文メのコース生だった頃と変りません。

しかし、助手として共立に戻り、大きく変ったと感じたことが一つあります。それは、「文芸メディア演習」という科目ができたことです。少人数で、文メの先生方の授業を受けることができ、授業ではグループワークを行ったり、クラスの仲間と発表の準備をしたり、コース生同士で切磋琢磨しながら勉強に取り組むことができます。大人数の文メだけれども、コース生で顔馴染みになるチャンスです。さらに、先生方との距離も一層近くなり、ご指導いただけます。

皆さんが何か悩んでいたり、困ったことがあったりしても、先生方や同コース生の仲間に相談しやすくなったのではないでしょうか。（生田）

〈文芸教養〉ちょっと気取って

「ちょっと気取って書く」というのが、よい文章を書く秘訣だそうです（丸谷才一『文章読本』）。ポジティブ・シンキングのなせるわざなのかも知れませんが、そればかりではありません。

身づくろいのことを想い出しましょう。ちょっと気取って自分を演出する能力は、一朝一夕に身につくものではありません。日頃から目をこやし、趣味を磨いていることが大切です。おしゃれの心がまえは文章にも通じます。色々な文章に触れて目をこやし、趣味を磨き、できればその幅を広げましょう。同じことを字にするにも、「ちょっと気取って」言葉づかいや、話題の並べ方に工夫をこらすようになるはずです。

文教のブックマラソンはちょっと気取りたいあなたのお供です。

え、気乗りがしない？　それなら、毎朝、身づくろいの鏡に向かって「あなたは学究の徒です」と声に出して語りかけ、ちょっと気取って出かけましょう。本棚は全然気取らずに、愛想よくあなたを迎えてくれますよ。（上野）

〈司書課程〉図書館界のイベント

過去の話を一つ。昨年九月、ウチの図書館から「十一月に行われる『図書館総合展』に学生さんを連れて行きませんか？　お手伝いします」という大変ありがたい提案がありまして、ホイホイと話に乗りました。これは図書館界の見本市で、企業が図書館向け製品の発表をしたり団体が活動報告をしたりします。主催者が行う大学生向けガイドツアーを利用し、ウチの図書館のOPACを提供している企業などのいくつかの展示ブースを回ってお話を伺ってきました。図書館業界は意外に盛り上がっているのだな、ということを参加した学生は感じたようです。

次にこれからの話を。この八月に国際学校図書館協会（IASL）の年次総会が日本で行われます。世界各国から集まった学校図書館員や研究者が「デジタル化時代の学校図書館」をテーマに発表や議論を行います。また、関連企業が展示を行います。五日間という開催期間の長さは学校図書館が大きなテーマであることを示しています。会場はすぐそこ、明治大学です。（藤田）

〈教職課程〉教養の輪郭

入学から卒業までの四年をかけた長丁場の上に、介護等体験、教育実習、教職実践演習等の対外活動を含めて、教職課程の履修は息の抜けない作業の連続です。

教職カリキュラムは、一年次の「教職入門」から始まり、四年次後期の「教職実践演習」で締め括られる「教職に関する科目」（合計三十三単位）と、取得を希望する免許教科ごとに学部の理念の支柱となる科目を中心とした「教科に関する科目」（二十～二十七単位以上）および「教科又は教職に関する科目」（八単位）、さらには「体育」「法学（日本国憲法）」「情報機器操作」などの「その他の科目」（八単位）等で構成されています。

これは結果として、文芸学部カリキュラムの中では最も輪郭が明確で、ヴォリューム的にもコースごとの必修科目・単位数を上回る大きな塊となっています。文学、芸術に関する専門教養を幅広くといって、とかくぼんやりしたものになりがちな大学での学びに輪郭を与える手立ての一つがここにはあります。（葉椰子）

プロフィール　杉村使乃（すぎむら　し の）先生（准教授）

「都心にある共立に勤め出してから、今までよりも舞台を見に行くことができるようになって、楽しいですね」。ご趣味の観劇について溌剌とした笑顔で語る杉村使乃先生。昨年度、英語英米文学研究室に着任された。

新潟県ご出身。高校生の頃から外国文学を好まれ、青山学院大学の英文科に進み、そこでの青山誠子先生との出会いをきっかけとして、研究の道へ進まれた。十九世紀イギリスの女性作家を取り上げた青山先生の授業で、男性社会である文壇での女性作家たちのあり方や、作中での女性の描かれ方に興味を惹かれたという。それは学術的な面にとどまらず、人生に対する「気付き」を得るきっかけになったという。なお、青山先生はかつて共立の教壇にも立たれていた縁ある方だ。

教鞭をとり始めてから、次第に十九世紀全体に網羅する範囲が広がり、現在のご専門であるイギリス児童文学に辿り着く。「十九世紀は、児童文学の黄金期の始まりなんです」。そもそも「子ども向け」というマーケットができたのが十九世紀であった。大人の読んでいたものが、次の世代では児童文学にスライドされる例も多いという。「ブロンテの『ジェーン・エア』も、元々子どもをターゲットにしていたものではないですが、児童文学全集に入れられるものの一つです」。

学生時代にはまた、英字新聞を作るサークルに参加。「中立であり、かつ主張もあるという報道の難しさを学生新聞でありながらも体験できたのは面白かったですね」。入部の理由は女子寮の友人、先輩との縁だったという。女子寮の生活は、「女性同士が本当に親しくなれる場であり、かっこいい先輩もいらして、すごく刺激的でした」。

そんな先生だが、着任当初は女子大ということにとても緊張されていたそうだ。しかし今では「教員という仕事で得なのは、同世代であればつき合わなかったような様々な人と関われること」と、学生との交流を楽しんでおられるご様子。このように、人とのつながりを大切にされている点がお話を伺っていてとても印象的だ。

『第二次世界大戦の大衆メディアにおけるジェンダーとエスニシティ表象』というテーマの共同研究にも参加されている。「学際的な交流をしつつ研究ができるというのが、今の私にはとても有益なものになっています」。青山先生に始まり、素敵な女性の先輩方との出会いが多くあったという。「いつも、こんな風になれたらいいなっていう人が近くにいてくれたことは、すごくありがたいことでした」。

我々の「素敵な先輩」である先生から共立生へメッセージを伺うと、「十四階でもっとキョロキョロした方がいい！」とまず一言。十四階の各研究室前で、学会・舞台・展覧会等の案内を掲示しているが、先生も情報収集に活用されているそうだ。「インターネット社会だと、自分の好きな情報はいくらでも掘り下げられるけれども、広く色々な情報に触れることは意識しないとできない。大学は広く色々な情報にアクセスする大事な場所だと思う。大学で過ごす時間を楽しんでほしい」。（松野）

▽本学では、児童文学概論、英米文学各論、英米文学小説講読、英語英米文学演習、文芸ゼミナール、卒業論文ゼミナール、英米文学・論文研究、近・現代英米文学講読、近・現代英米文学特講をご担当。

〜ひと言ふた言〜　Information Sharing Is Key

Communication really is the key to success in our line of work, and communication across organizational boundries is probably one of the most important patterns we can engage in. As a teacher of writing in English based courses, I have found it incredibly helpful to talk about the process of academic writing with instructars teaching writing in Japanese. The more I know about how the teaching of academic writing is done in the Japanese-based classes at Kyoritsu, the easier it is for me to decide how to convey important concepts and techniques concerning an English based writing process to my students.

Often such converations take place 'on the fly,' i.e. whenever and wherever I happen to meet teachers from the Japanese writing classes. The information they give me is extremely helpful, even when we happen to be wrestling with a question that really has no clear answer. One example would be, "How do you translate the term 'thesis statement' into Japanese?" I've asked this question to other faculty up and down the hallways and from the first the the fifteenth floor, and I haven't found anyone who can give me an exact translation, probably because none exists. The current consensus would have it that the closest we can get is that it's something like a ketsuron that appears at the beginning of a piece of writing, rather than at the end. That may or may not be the best way to explain the concept to my students, and we may yet hit on a better translation of the term, but the fact remains that the broader our communication is among our colleagues, the better.

（Article by C.Hoskins）

大学院文芸学研究科情報

文芸学研究科は、昨年度から日本文学・英文学・演劇学に文芸学が加わり、四つの研究領域で構成されています。学部で勉強したすべてのテーマを、そのまま大学院で発展させる可能性があります。興味のある方は、卒論指導の先生に相談してみて下さい。（鈴木）